

## 1. 現在の発掘調査状況

土橋北遺跡A区は、2月15日にすべての調査が終わりました。今年は例年になく大雪に見舞われ、調査現場の除雪のほか、調査区にテントを設置するなど、雪対策を行いながら調査をおこないました(第1・2図)。

今回は、A区の調査成果をまとめたいと思います。

## 2. 江戸時代(約400年前)の百津村

江戸時代では、三国街道(中通り)の一部が見つかりました(第3図)。道路の側溝は何度か掘り直されていて、継続的に維持・管理されていたと考えられます。また、この道路の両側には、掘立柱建物・井戸などが並び、道路沿いに村が作られていた様子が明らかになりました(第4図)。建物の柱穴や道路側溝から出土した陶磁器の年代から、百津村は約400年前の江戸時代にできたと考えられます。これまでの調査で、百津村は東西約150mの規模であったことがわかりました。

このほか、A区では昔の川跡が見つかりました(第5図)。川跡は縄文時代後期(約3,500年前)以降にできたものと考えられます。その後、この川は湿地に変化したことがわかりました。江戸時代になると、周囲の土を削って湿地を埋め立てたことが明らかになりました。

江戸時代の中頃から新田開発がさかんに行われるようになります。百津村の人びとも、大規模に土を削り湿地を埋めて地形を平にしています。このように、当時の人びとが、様々な苦勞をして耕地を切り開いていった様子がうかがえます。



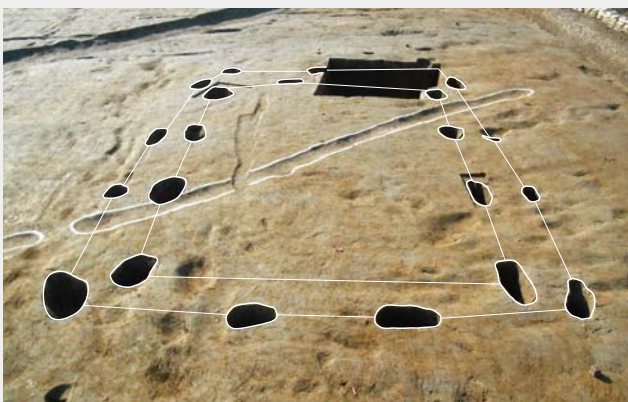
第1図 A区 調査風景①



第2図 A区 調査風景②



第3図 江戸時代の道路(三国街道)



第4図 江戸時代の掘立柱建物



第5図 江戸時代に埋められた川跡



### 3. 縄文時代後期（約 3,500 年前）の様子

縄文時代後期の層からは、たくさんの土器や石器が出土しました（第6・7図）。土器は後期前葉の南三十稲場（みなみさんじゅういなば）式土器、後期中葉の加曽利（かそり）B式土器が出土しています。このほか、関東で使われた堀之内（ほりのうち）式土器の出土もみられ、関東の人たちとの交流もおこなわれていたこともわかりました。

石器は石鏃（せきぞく）など狩猟に使われたものが極端に少なく、磨石（すりいし）など植物加工に使われたものが多く出土するのが特徴です。「たより1月号」でもお伝えしたように、遺跡からはクリが大量に出土します。A区では磨石などを使って、クリなどの木の実をさかんに加工していたのかもしれない。

このほか、アスファルトの付いた石のおもりや、土製のおもりなども出土しました。このことから、人びとは、川で魚をとって生活していた様子もうかがえます。アスファルトのほかには、ウルシの付いた土器も見つかっており、遺跡内でウルシが利用されていたことも明らかになりました。

今後は、土橋北遺跡で縄文時代の人びとがどのような環境で、どのような生活をしていたのかを詳しく調べていきたいと考えています。

### 4. 地震の痕跡

遺跡では、たくさんの地震の痕跡が見つかりました。このうち、A区では地面全体が大規模に陥没した跡が発見されました。第8・9図の黄色い線の付近では、砂と水が吹き上げた液状化が広範囲に発生しています。その結果、地形は西側へ向かって全体に陥没したものと考えられます。大きな地震は、これまでの調査で複数回起きていることがわかっています。江戸時代の村の一部は、地震によって壊されていることが明らかになりました。したがって、見つかった地震のうち、もっとも新しい地震は江戸時代に起きた可能性が考えられます。

このように、発掘調査では過去の被災状況を具体的に知ることができます。発掘調査で発見される地震痕跡など自然災害の調査成果を、今後の防災・減災に役立てていきたいと考えています。



第6図 縄文土器の出土状況①



第7図 縄文土器出土状況②



第8図 大規模な陥没①



第9図 大規模な陥没②